

第2節 亀井遺跡出土第Ⅴ様式土器について

1 はじめに

畿内における第Ⅴ様式土器について、都出氏は「小地域単位の編年を細かく進めつつ、地域編年相互の横の関係を把握する」必要性を強調された。そして、過去の研究が最も進んでいる中、南河内地方を典型地域として設定し、甕型土器の製作技法の変化に基づいて、西ノ辻Ⅰ式→西ノ辻Ⅱ式（Ⅰ）式、上六万寺式→北島池下層式を提唱した（都出 1974）。

都出氏の提起を受けて、森岡氏は、第Ⅴ様式を前半、後半の2時期に分け、さらに前半を2小期に、後半を3小期に峻別し、畿内の5地域の一括土器を細分小期ごとに並べ、その併行関係、前後関係を示す試案をうち出した。

また、森田氏は、製作技法の変化過程から第Ⅴ様式を6型式に細分し、二重口縁壺、手焙形土器の出現をメルクマールにして、前半と後半に分けている。

最近では、六条山遺跡の調査報告書の中で寺沢氏は、編年細分を行う上での方法論の問題、土器に与えられる基本的な概念認識の問題を明らかにした上で、「いわゆる第Ⅴ様式」の細分試案をうち出している。ここでは第Ⅴ様式を6つの細分様式に細別し、さらに各様式における形式の出現・消長、型式の変化、技法上の変革等を考慮して、Ⅰ（様式1～3）、Ⅱ（様式4～5）、Ⅲ（様式6）にまとめ、将来畿内第Ⅴ様式が設定されるならば、4、5、6の様式をこれに該当させたいとしている。

亀井遺跡の位置する河内平野部においては、十分な資料がなく、編年案がないのが現状であったが、最近刊行された瓜破北遺跡の報告の中で、当遺跡出土の第Ⅴ様式土器に対して、相対的な位置づけがなされた。各器種の形態分類を行った後、都出試案に基づいて各器種の検討を行ない、「本遺跡出土の土器は、必ずしも安定した組成とはみなし難いが」とことわった上で、「西ノ辻Ⅰ式に近い土器群を含むことを認めつつも、西ノ辻Ⅱ式（Ⅰ）式期に一点の共有時期をもった土器群といえるであろう」と結論する。そして、SD17出土の一括土器群について、「第Ⅴ様式中頃でも古相を呈する当地域の土器のメルクマールになりうる」として、「長原遺跡SB01出土の土器と共通する要素を有しながら、より古く位置づけられると述べている」（財）大阪市文化財協会 1980）。

長原遺跡の31工区SB01住居址出土の一括資料は、若干新しい要素をもつものも混在すると思われるが、西ノ辻Ⅰ地点の土器群にほぼ併行する一群であると考えられる。

以上のことをふまえて、亀井遺跡出土土器の器種分類を行った後、各器形の類例を中、南河内地方の他遺跡に求めながら、編年的位置づけについて若干検討していきたい。

第4表 亀井遺跡出土第V様式器種別個体数

器種 遺構	広口壺			短頸壺	小型壺	長頸壺			無頸壺	甕					鉢			高杯				器台	手焙	壺用蓋	その他
	A	B	C			A	B	C		A ₁	A ₂	B ₁	B ₂	C	A	B	C	A	B	C	D				
SK3004	1																1	2							
SE3004	(1)																1								
SE3005					3(1)													1		1					
SE3006	(1)				2																				
SE3011		1				2(1)												1							
SE3012						1											1								
SD3008					6	1						1						3		4		1			タコツボ
SD3033	2					2	1			1		1	2	1				1				1			
SD3035		1			1							1													
SD3036		1			1							1	1					1							タコツボ
SD3037					1																				
SD3041		1				4	1	(1)	1	1		9	2	2			2	2	1	1					
NR3001	(1)	2(1)	1		2	4(1)						7(2)			1	1		1		2		1	1		
I包含層 a		3					2											1	1						
I包含層 b	2(1)				2							2										1			

2 器種分類

a 広口壺形土器

A 口縁端部に粘土を貼りつけて垂下させ、端面に装飾を施す壺である。竹管文（第198図1）、凹線文（第217図10）、凹線文上に円形浮文を加えるもの（第332図13）などがある。全く装飾しない例（第202図3）もある。胴部は、ヘラミガキ調整する。

B 外反した口縁部の端部に面をなすもの（第247図1）、丸くおわるもの（第228図1）がある。

C 扁平な胴部から外反し、屈曲してさらに外反する二重口縁をもつ（第247図5）。

b 短頸壺形土器

斜め上方に立ち上がる口縁部をもつもの（第211図2・8・11）、内彎ぎみに立ち上がるもの（第202図2）がある。ほとんどが、大きな平底で縦長の胴部を有する。

c 長頸壺形土器

A 縦長の胴部に、わずかに外反する円筒形の口頸部を有する。内面はハケメ、外面は縦方向にヘラミガキ調整するものが大多数で、肩部に記号文を施すもの（第331図4）、口縁部は不明であるが頸部に凸帯をめぐらすもの（第206図1）がある。

B 広口の長頸壺である。形態、調整はAとほぼ同じであるが、外反する口縁を下方に拡張し、端面を装飾する壺である。（第236図7）

C 器高が20cm前後の小型品で、粗雑なつくりである。球形の胴部に細長い口頸部がつくもの（第248図13）、円筒形の短い口頸部がつくもの（第248図12）がある。

D 口頸部はAなどに比べると短かく、胴部と口頸部の境が明瞭でない（第248図15）。

d 無頸壺形土器

横長のもの（第239図44）、縦長のもの（第331図5）がある。前者は、球形の胴部からわずかに立ち上がり、上端に面をなす口縁部をもつ。口縁部に2孔1対の紐孔を穿つ。後者は、縦長の胴部から立ち上がり、外方へ肥厚した丸みのある口縁部を有する。

e 甕形土器

A₁ 縦長の胴部に「く」の字状に屈曲する口縁部を有する。外面は、ヘラミガキを施すもの（第333図18）、ハケメ調整するもの（第218図12・13）がある。

A₂ 外面にタタキを施す。口縁端部に面をなすもの（第237図12・15・18）、丸くおさめるもの（第237図13・17）がある。器高15cm前後の小型品も多い。

B₁ 「く」の字状に屈曲した口縁部を上方へ拡張した受口状の甕である。外面、ハケメのもの（第237図19）、ヘラミガキを施すもの（第237図16）がある。

B₂ 形態はB₁と同じであるが、外面にタタキを施す。

C 脚台を有する小型品である（第249図17）。

f 鉢形土器

- A 「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ（第250図30）。
- B 外反する口縁端部を上方へ拡張して受口状の口縁を有する。（第238図30）。
- C 直口の鉢である（第240図50）。口縁部破片だけでは、高杯Cと区別が困難である。

g 高杯形土器

- A 浅い皿状の底部から屈曲して立ち上がる口縁部を有する。上方に立ち上るもの（第212図18・20）、大きく外反するもの（第238図24・28）がある。
- B 底部から屈曲して立ち上った後、再び屈曲して外反する口縁部を有する（第238図27）、（第332図9）。
- C 直口の碗形の杯部を有する（第212図14～17）。A、Bに比べ小型である。
- D 斜め上方へのびる底部から屈曲して、下方へ外反する口縁部を有する（第238図25）。

h 器台形土器

円筒状の胴部の上下を外反させて、端部を拡張する。口縁端面と胴中央に沈線を施すもの（第333図26）、端面に竹管文、胴中央に凹線を施すもの（第332図10）がある。

i 手焙形土器

胴のくびれ部から連続して覆部をつくり、覆部下方に羽状に斜線文を施すもの（第219図34）、「く」の字状に外反する口縁部をもった鉢部をつくった後、口縁端部、あるいは外反部の内側に覆部を接合するもの（第250図31）がある。

j 壺形土器

浅い笠状の体部中央に、突出するつまみをつける（第248図10）。放射線状にハケ目を施している。

3 編年の位置づけ

第Ⅶ様式の土器は、土坑（SK3004）、井戸（SE3004～7・11・12）、溝（SD3008、3032～37、3041、NR3001）の各遺構、およびⅠ-1・2地区包含層上層などからある程度まとまって出土した。中期の土器に比べると出土量は少なく、土坑、井戸出土のものは、個数も少なく、器種も限定される。

まず、一括資料と考えられるSD3008の暗褐色粘土層出土土器、Ⅰ-1・2地区包含層上層の土器を中心に検討していく。いずれも形態や技法から第Ⅶ様式前半と考えられる。

a 前半

SD3008出土品には、広口壺Aや長頸壺が一点もなく、壺はすべて斜め上方へ立ち上る口縁部をもった短頸壺からなる。大きな平底を有する縦長の胴部外面に、ヘラミガキを施す。胴部を成形した後に、底部の穴を内側から粘土でつめるためドーナツ状を呈する底部のものがある。壺Aが1点ある。内彎ぎみに「く」の字状に屈曲する口縁部を有し、大きな平底をもつ壺で、両面に

粗いハケ目調整を行う。高杯Aは、体部と口縁部の境に明瞭な稜をもたず、斜め上方に立ち上る口縁部を有する。脚部は、杯底部から内彎ぎみに外方へ伸び、端部でわずかに外反する中空のもので、2点とも類似する形態、技法を用いる。本遺構出土土器は、器種が限られているため、相対的な位置づけは難しいが、高杯Aの杯部の形態から見ても、西ノ辻I地点や長原遺跡SB-01出土土器より先行する可能性が考えられる。

I-1・2地区は、上層の第Ⅴa層と、その下の第Ⅴb層から出土する。b層からは、凹線文と円形浮文で飾った生駒西麓産の古相を呈する広口壺A（第332図13）、外面にハケ目調整、内面にヘラケズリを加えた小型の甕A₁（第332図16）、円板充填法を用いた高杯A（第333図21）、半球状の杯部を有する高杯C（第333図24）などが出土する。この高杯Cも円板充填法を用いる。

高杯Aは、口縁部と体部の境に明瞭な稜をもたず、杯部の形状はSD3008出土品と類似する。

b層出土土器は、円板充填法を用いた高杯A、Cの存在など、より古い要素をもちながらも、短頸壺や高杯AにSD3008出土土器と類似するものが見られる。

a層からは、記号文のある長頸壺A、体部と口縁部の境に明瞭な稜のある高杯A（第332図8）、高杯Bが出土する。高杯Aは、西ノ辻E地点、他地域では唐古70地点出土例と類似する。高杯Bは、他遺跡に類例はない。a層には甕の良好な資料はないが、この段階ではタタキメ調整をもつ甕は、すでに存在していると考えられる。

出土地点は離れているが、H地区の第Ⅴa層の下（I地区のb層に相当する層位）からも、第Ⅴ様式の古相を呈する土器が出土している。口縁部に凹線、竹管文、刺突文を施した短頸壺（第268図62）、外面ヘラミガキ調整する甕A₁がある（第268図65・66）。甕A₁は、口縁部や頸部にゆるやかな段をもつものがあり、瓜破北遺跡SD17出土の甕に共通するところがある。タタキメを施す甕は一点もない。

SD3008出土の短頸壺の頸部や肩部、I包含層b層出土の広口壺Aの口縁端部に赤色顔料⁽²⁾を塗布した土器（第274図3）がある。亀井遺跡第Ⅴ様式土器の中から、肉眼で観察できる範囲で丹彩されている土器を取り出してみると、25点あった。そのすべてが、SD3008、I包含層b層出土土器にほぼ共通する第Ⅴ様式の前段階のものと考えられる。広口壺Aは、端面に竹管文（第274図1・2・3）、あるいは退化凹線と竹管円形浮文を組み合わせた生駒西麓産のもの、波状文上に竹管文を施すものなどがある。甕Aの口縁端面に丹彩されるものが一点ある。胴部は欠損するが、大型の生駒西麓産の甕で、口縁端部の下端を肥厚させて面をつくり出す。高杯Aは、上方へ立ち上る口縁部を有するもの（第274図8・9・10）で、口縁部上端に、はっきりとした面をつくり出す。脚部は、円板充填法を用い、中空の円筒状の脚柱部を有するものである。器台は、第Ⅳ様式の系譜をひく大型のものである。口縁端面を波状文と竹管円形浮文で飾り、口縁内面にも波状文を施すもの（第274図4）、口縁端面に鋸歯文、内面に綾杉文を施すもの（第274図6）などがある。これらの土器は、高杯Aの製作技法や形態に第Ⅳ様式の要素を残しながらも、SD

3008、H、I 地区包含層 b 層出土土器にほぼ併行する時期のものであろうと思われる。上記の土器は、第Ⅶ様式前半の中でも最も古い段階に位置づけられ、I 地区包含層 a 層出土土器は、それに続く資料と考えられる。

土坑（SK3004）、井戸（SE3004～6・11・12）出土土器は、個体数は少ないが、広口壺 A、高杯 A の形態、長頸壺 A の存在から判断して、第Ⅶ様式前半と考えられる。

b 後半

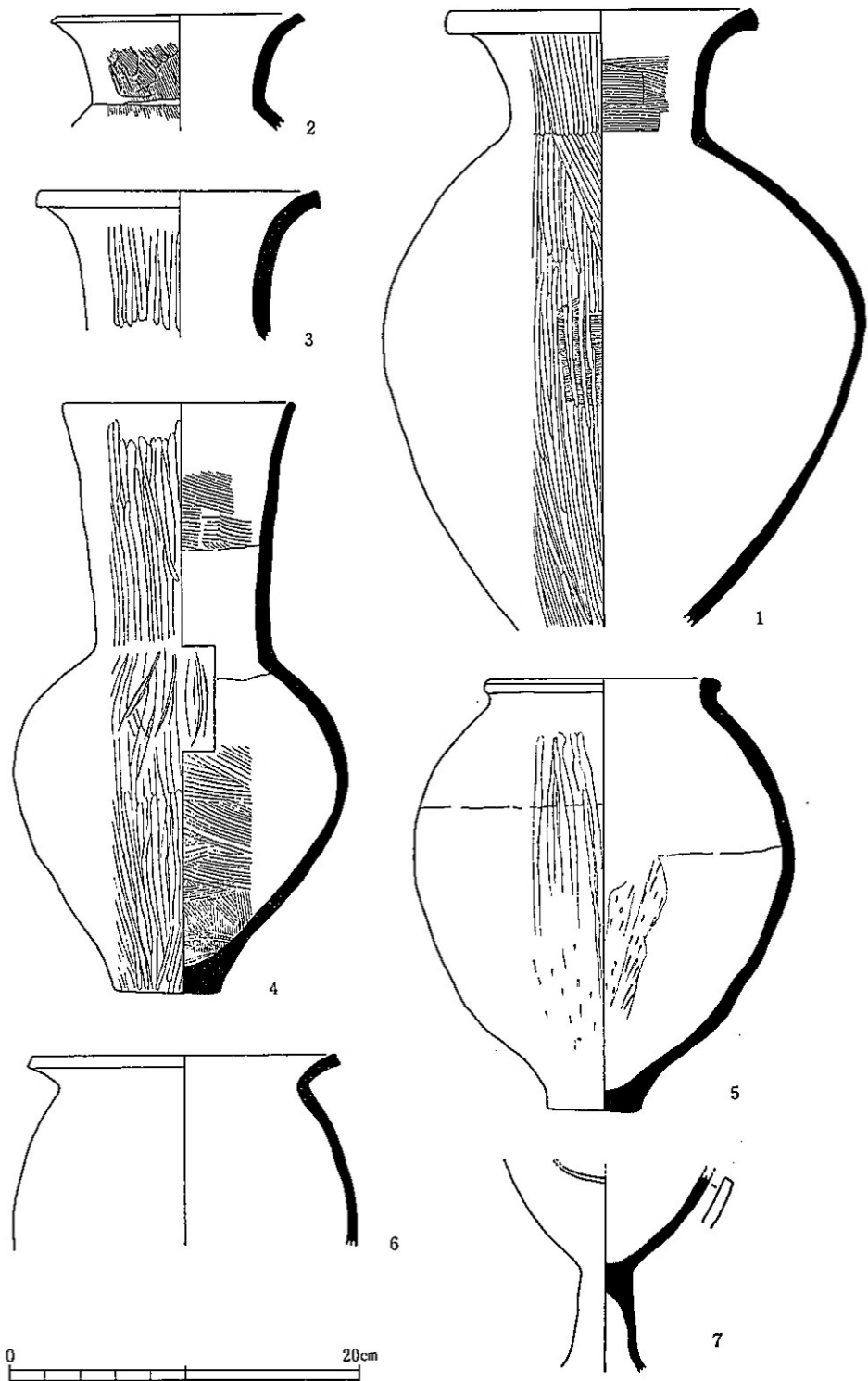
SD3033 出土土器は、第Ⅳ様式土器と混在し、第Ⅶ様式後半に出現する手焙形土器を含んでいる。長頸壺 A（第 217 図 6）、口縁部が上方へ立ち上る高杯 A（第 219 図 24）は前半と思われるが、手焙形土器は、鉢部と覆部を区別してつくる技法や形態も、後半の古い時期に位置する船橋遺跡や馬場川遺跡に類例が見られ、広口壺 A（第 217 図 10）も船橋例と類似する。従って、SD3033 出土土器は、第Ⅳ様式から第Ⅶ様式後半の古段階まで、時期的に幅をもつと考えられる。

SD3041 出土土器は、生駒西麓では第Ⅶ様式後半の古い段階に位置づけられる馬場川遺跡、次の段階の上六万寺遺跡出土土器にほぼ併行する資料であると考えられる。口縁端面を竹管文で飾る生駒西麓産の長頸壺 B（第 236 図 7）は、馬場川井戸 I 類土器などに類例が見られる。また、受口状口縁の甕が、甕全体の 3 分の 1 を占めるようになり、小型壺や鉢にも同様の口縁をもつもの（第 236 図 10・第 238 図 30）が見られるようになる。甕 A は、丸胴に近い小型品もあるが（第 237 図 12）、ほとんどが胴の張らないものであり、タタキメの傾斜の違いから、胴部を 3 段階で成形したことがうかがえるものが多い。

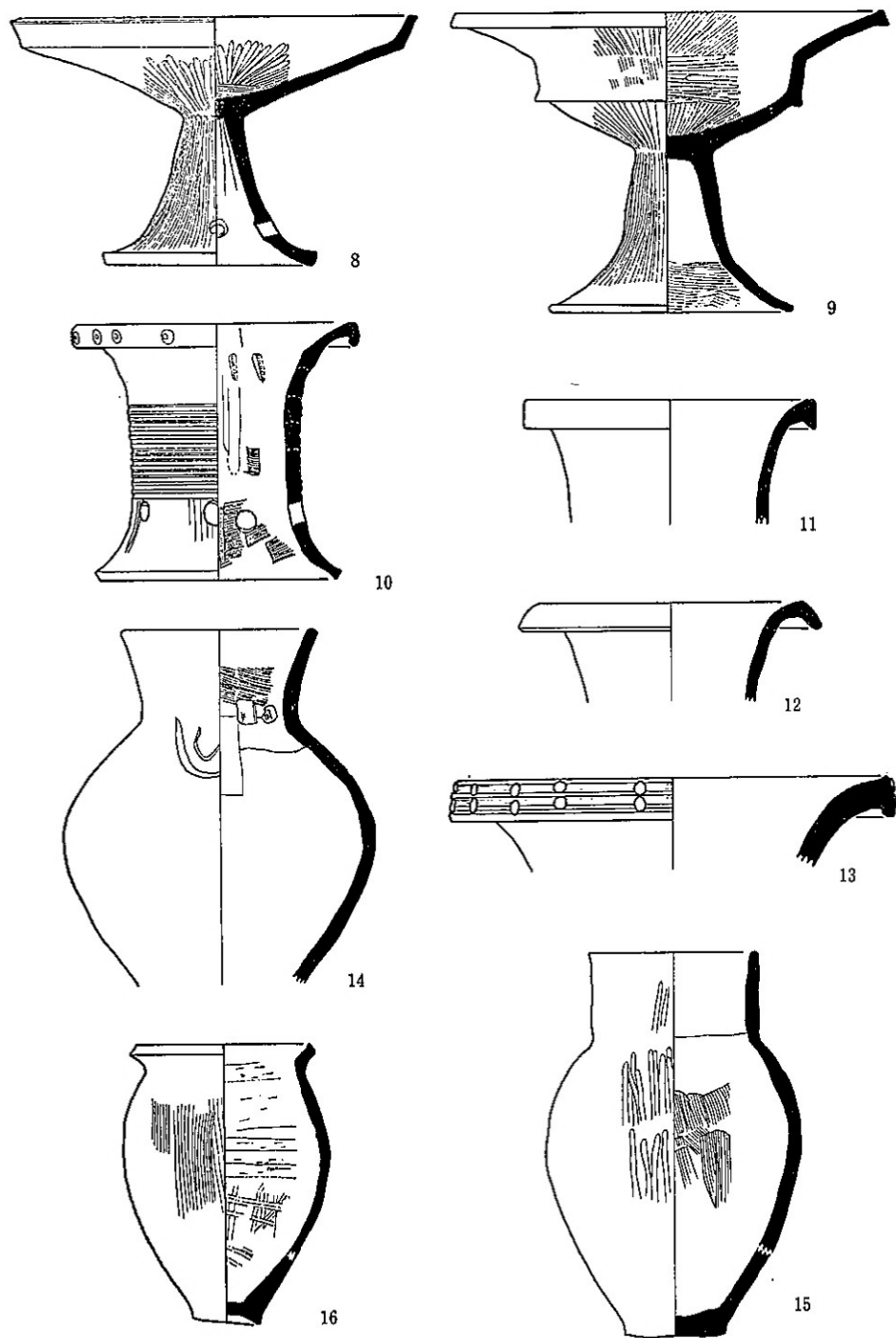
高杯 A は、馬場川や上六万寺例に比べると底部が小さく、口縁部の外反度が大きい（第 238 図 24・28）。

高杯 D は、前半の長原 31 工区 SB01 住居址出土品に類例が求められるが、本例は口縁を丸くおさめ、脚部の形態も長原例と全く異なる。長原例は、中期の垂下口縁の高杯を思わせる段を内面にめぐらせるが、本例は、そのような痕跡を止めず、作りも粗雑である。

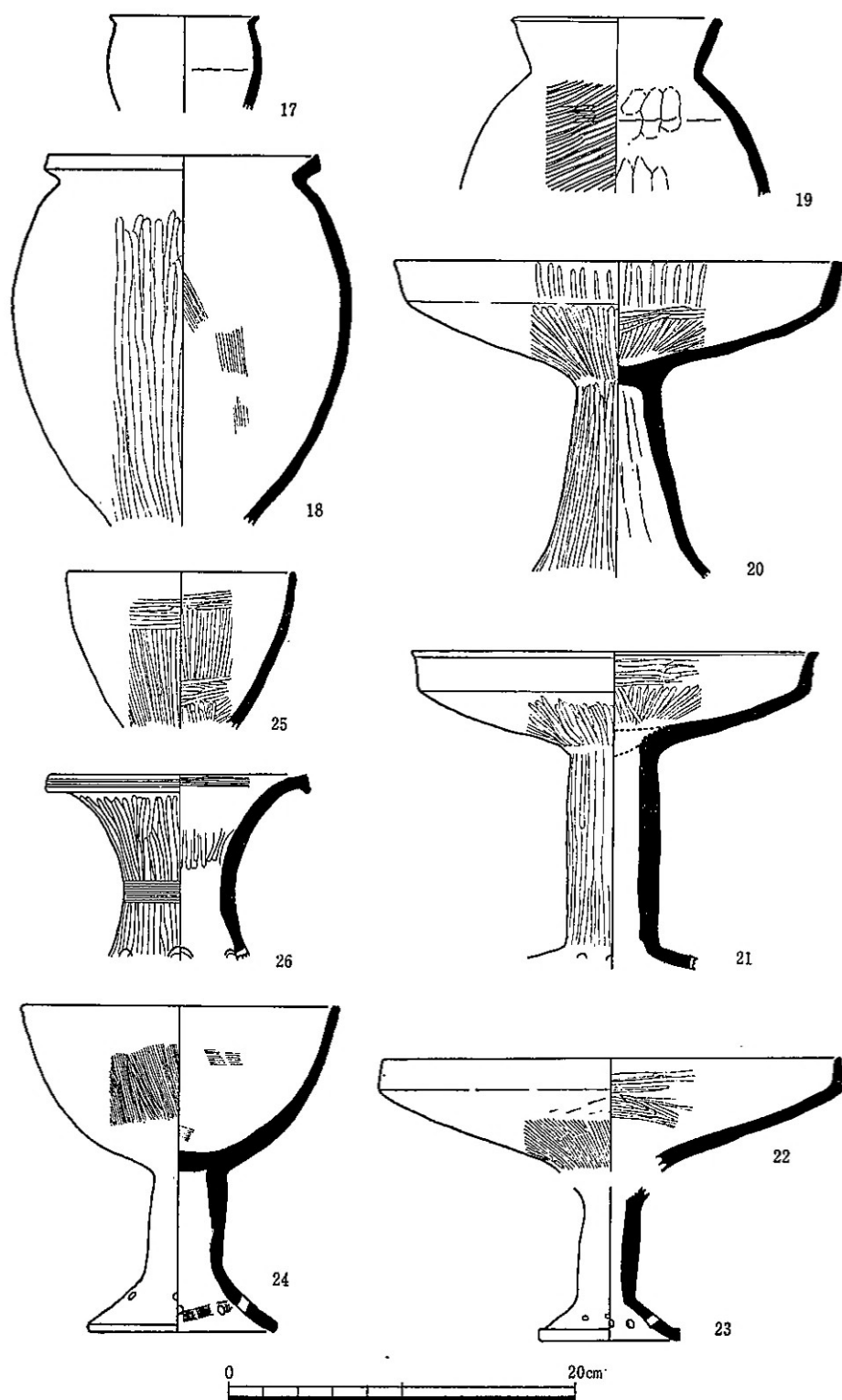
NR3001 は、二重口縁壺、台付甕、手焙形土器など後半になって出現する器形が多く含まれる。台付甕（第 249 図 17）は、後半中葉に出現する器形であり、広口壺 B、甕 A、高杯 A など、後半中葉に一般的な形態の土器を多くもちながら、二重口縁壺（第 247 図 5）、胴の張る甕 A など、後半末の様相をもつ土器も若干含まれる。甕は、SD3041 出土例のように受口状口縁を有する甕 B は 1 点もないが、「連続ラセン状叩き」「口縁叩き出し手法」を用いた、胴部の張る甕 A が 1 点出土する。これは、生駒西麓産のもので、北鳥池下層例に類似する。亀井在地の胎土と思われる甕 A は、「連続ラセン状叩き」手法を用いた例はなく、胴の張りは少ない。



第331図 I-1・2地区第Ⅸa層出土土器実測図



第332图 I—1·2地区第IX a 层·b 层出土土器实测图



第333図 I-1・2地区第Ⅸb層出土土器実測図

4 おわりに

以上、類例を中、南河内地方の他遺跡に求めながら、亀井遺跡の第Ⅴ様式土器の相対的位置づけを行なった。先学の編年細分をふまえて、本遺跡出土土器の類例を、編年の位置づけがなされている他遺跡に求めて新旧関係を述べていくことに終始し、製作技法や形態の変遷、器種の出現・消長について充分検討できなかったことを反省している。

西ノ辻Ⅰ地点、長原31工区SB—01出土土器と共通する要素をもった土器を含みながらも、より古く位置づけられる土器が本遺跡にも存在することが判明した。現在調査中の近畿自動車道予定地内の亀井遺跡から、第Ⅳ様式と混在して、第Ⅴ様式の土器が多数出土しつつある。整理が進めば、解明されることが数多くなると思われる。

本遺跡は、短頸壺の占める割合が多い（壺総数61点のうち18点が短頸壺）。腹径18～20cm、器高25～30cm程で、斜め上方へ立ち上がる口縁に、大きな平底をもった縦長の胴部を有するものがほとんどである。第Ⅴ様式前半の古い段階に集中するが、後半の土器が主流をなすNR3001からも2点出土する。大部分のものが、二次焼成をうけて変色したり、ススが付着しており、SD3008の、帯状に丹彩した例（これにもススが付着している）を見ても、他の壺とは異なる特別な用途が考えられる。

他の点については、器種のセット関係や技法においても、中、南河内の他遺跡と異なる際立った地域性は見られない。中期の土器は、生駒西麓産の占める割合が30%あるのに対し、ここで取りあげた範囲内での第Ⅴ様式の中で、生駒西麓産の占める割合は、わずか7%である。壺2点以外は、すべて壺に限られる。壺は各器種に及ぶが、広口壺Aに、生駒西麓産のものが多く、生駒西麓産の黒褐色の土器以外は、淡褐色、茶褐色のものなど様々な胎土の土器があるが、現段階では、どれが亀井在地の土器であると断定することができない。科学的な分析も含めて、今後の課題としたい。

後期後半には、NR3001、SD3033、35～37、41の溝が流れているが、居住地は溝の周辺にはないことが、調査の結果明らかになっている。庄内式の土器が全くなく、布留式の土器が稀薄であるという事実からも、亀井集落のあり方がある程度判明するのではないかとと思われる。

〔註〕

- (1) 実測可能なものを数えた。()をつけたものは、その点数の中で生駒西麓産土器の占める数である。口縁のみの残存で、鉢Cと高杯Cの区別ができないものについては、鉢Cに加えた。
- (2) 丹彩の可能性が強いが、科学的分析を行っていないので、丹かどうか不明である。
壺A器台には、口縁端面に、短頸壺には頸部や肩部に帯状に、あるいは記号文として、高杯には全体に施している。
25点のうち、壺Aが7、短頸壺が3、高杯Aが6、高杯Bが1、甕Aが1、器台が6、不明品が1である。

〔引用文献〕

- (財)大阪市文化財協会 1980 『瓜破北遺跡』共同溝建設工事に伴う発掘調査報告書
都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係—淀川水系を中心に—」 考古学研究 第20巻第4号

〔参考文献〕

- 井藤暁子・藤田雅子・上西美佐子・清原弘美 1979 『池上遺跡』第2分冊 土器編 大阪文化財センター
- 久貝健 1970 「北島池遺跡」『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高等学校地歴部
- 小林行雄 1958 「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」『弥生式土器集成』資料編1
- 小林行雄 1958 「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡E・F・D・H地点の土器」『弥生式土器集成』資料編1
- 佐原真 1968 「近畿地方」『弥生式土器集成』本編2
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊
- 高槻市教育委員会 1977 『安満遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第10冊
- 長原遺跡調査会 1976 『大阪市平野区内長原遺跡発掘調査』資料編
- 奈良県立橿原考古学研究所 1980 『奈良市六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書
- 東大阪市遺跡保護調査会 1977 『馬場川遺跡発掘調査報告』
- 福永信雄・勝田邦夫 1975 「上六万寺遺跡」『東大阪市遺跡保護年報Ⅰ』
- 村川行弘 1967 『田能遺跡概報』尼崎市教育委員会田能遺跡発掘調査委員会
- 森岡秀人 1977 「畿内第Ⅴ様式の細分編年と大師山遺跡出土土器の占める位置」『大師山』関西大学考古学研究第5冊